

選者 川口孤舟

出席者 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 後藤とみ子 在間千恵 佐藤忠重(表記「た」)

豊田穰(表記「ゆ」) 西澤國護 長谷見敏(表記「び」) 星田啓子

投句・選句 伊賀山そらお 今井紀久男 熊谷國男(表記「く」) 小早健介

朱牟田静雄(選者表記「恵」) 高橋康敏 土谷堂哉 中川雅夫 福島正明

古川百合子 古田昇 山崎亜也 山田啓子(選者表記「け」) 山内天牛

渡邊盛雄

選句のみ 梅崎哲雄(表記「くす」) 重枝孝岳 庄司龍平 高橋清子 宮内規雄

橋口隆 山本三恵

【互選句】 ○は選者の特選 ○は孤舟選者の選

九点 ◎葭切や蘆辺にみづく捨小舟 康敏 (紀・孤・く・健・孝・恵・昇・啓・〇三)

八点 ◎お別れは木の教会で野薔薇咲く 五郎太 (孤・忠・龍・康・隆・亜・天・盛)

七点 ◎居間客間干場となりぬ梅雨の空 忠彦 (くす・孤・と・た・國・び・〇盛)

六点 蛇皮を脱ぎて輪廻を諾へり 孤舟 (くす・健・五・恵・〇康・昇)

雨蛙空がだんだん重くなり 全 (忠・恵・康・百・規・け)

立ち上がる仔馬に朝の風清し 全 (そ・健・堂・正・昇・規)

生垣の四角に刈られ夏匂ふ 五郎太 (と・恵・清・康・雅・天)

町名のここより変る夾竹桃 とみ子 (くす・五・恵・堂・啓・天)

梨園にも禍事(まがごと)ありて梅雨募る 恵洲 (紀・〇くす・千・正・啓・盛)

◎ラケットの快音響く夏の空 ゆたか (孤・と・た・清・國・昇)

やどかりに足裏疼く島の夏 びん (そ・健・た・孝・堂・啓)

五点 夏草の花を避けつつ道歩む ゆたか (そ・孝・雅・國・規)

◎カクテルに彩り添ふるさくらんぼ 昇 (孤・龍・康・び・盛)

◎振り花素直になれぬ児に似たる 百合子 (忠・孤・く・堂・三)

風に舞ふ青のリボンや夏帽子 正明 (くす・忠・清・隆・天)

檜茂る築百年に一人棲む 盛雄 (く・千・龍・百・け)

四点 蝙蝠の膨らんで舞ふ夕間暮れ 孤舟 (び・百・け・三)

神馬舎の一灯暗し夏木立 くに お (恵・康・〇堂・け)

馬手(めて)に傘弓手(ゆんで)に杖の梅雨に抗す 恵洲 (紀・〇健・ゆ・亜)

老鶯の鳴く音樹間に木霊せり ゆたか (そ・け・健・雅)

新緑に染まる思いに丘巡る 國護 (そ・紀・健・雅)

雲の間に囁くやうな梅雨の星 昇 (ゆ・國・盛・規)

天と地を分くるあぜ道苗代田 啓子 (そ・紀・忠・清)

三点

◎縦の列右向け右の立葵

紫陽花は土の力で色を変え

忠彦 (孤・千・清)  
ただしげ (忠・ゆ・び)

菜園の胡瓜漸く食卓へ

全 (隆・び・規)

闇せまる糺(ただす)の森や青葉木菟

康敏 (紀・〇く・盛)

額の花今朝も活き活き庭に咲く

ゆたか (雅・び・規)

紫陽花の途切れず蒼き電車道

啓子 (ゆ・國・正)

冥きより灯持て筋引く螢の来

全 (五・百・三)

見えを切る小さき役者夏袴

けい子 (紀・た・隆)

◎軽鴨の子のモンローウオーク時停める

盛雄 (〇紀・〇孤・〇昇)

二点

梅雨晴れや友の電話の声高し

そらお (雅・清)

高山堂店主(神保町最長老)

司馬遼のネタ本一手に涼みおり

紀久男 (け・三)

追悼 市川段四郎丈

地味な芸沢瀉手向けむせーヌ川

全 (隆・啓)

百足虫走る脚の縛ることもなく

孤舟 (と・百)

梅雨中の異次元世界水族館

健介 (千・百)

ジャワ更紗花柄合ふて帯涼し

とみ子 (た・堂)

歌舞伎つてファンタジーかも虹立ちぬ

千恵 (紀・〇正)

昔はきらい今はそれなり豆御飯

全 (と・亜)

手に三つ染み見つけたる梅雨入かな

全 (啓・亜)

梅雨空や卑弥呼は何処また闇へ

ただしげ (健・千)

江ノ島にて

黒南風や荒磯(ありそ)見下ろす芭蕉句碑

康敏 (くす・ゆ)

老いの身の日毎新たに夏来たる

ゆたか (龍・國)

半夏生水鉢映す白化粧

雅夫 (紀・孝)

風強しかぶり直してパナマ帽

國護 (五・天)

五月雨や読経のごとく節つけて

百合子 (〇孝・天)

露伸びる畑の隅に墓ある地

啓子 (亜・三)

「みなづき」の三角うれし略点前

亜也 (紀・龍)

一点

夏場所や頭捻りと云ふ珍技出る

紀久男 (く)

夏鶯の美声に釣られ病棟を出

全 (五)

紫陽花や万里子先生神のもとへ

忠彦 (正)

句師からの教へ心に勿忘草

全 (紀)

剣山のあやめは真夜に開きけり

くにお (孝)

夏芝居夜は家にと母小言

とみ子 (紀)

青柿の葉よりも青く育ちをり

全 (紀)

◎峰雲や翔平聡太の神懸る

健介 (孤)

三角の菓子が決まりの夏祓

五郎太 (く)

桜桃忌小屋に太宰の「ハムレット」

千恵 (隆)

二十歳夏史上最速名人位  
 夢ぬちの父若くして白き靴  
 田鶴舞ふや和歌山城の緑濃く  
 朝の如雨露百合の若芽を膨らます  
 沙羅の花浄土の庭を喜べり  
 届きたるばかりの新茶封を切る  
 小学校激減続き昭和去る  
 暴れ梅雨少年家に閉じ込む  
 砂は炎え襲うとんびの影迅し  
 峠来て松蟬聴けり裏日本  
 朝の茶は草根木皮山清水  
 ◎億年のメタセコイアに梅雨の雨  
 武者人形暗き座敷の奥に立つ

ただしげ  
 堂哉 全 (龍)  
 全 (紀)  
 全 (垂)  
 全 (五)  
 雅夫 全 (千)  
 國護 全 (正)  
 全 (天牛)  
 全 (びん)  
 全 (け)  
 全 (昇)  
 全 (健)  
 啓子 全 (孤)  
 けい子 (た)

## 【句 評】

### 九点句

葭切や蘆辺にみづく捨小舟

康敏

孤舟選者・・・昔の渡し場跡の傍らに捨て小舟。葭の茂みから賑やかな行々子の声。

恵洲さん・・・けたたましく鳴くヨシキリと沈みかかった捨て小舟と。葦の茂る古い沼の水辺の景が目に見える。

くにおさん・・・蘆辺で大葭切がギョッギョッと賑やかに鳴いている。その傍らに乗り捨てられたと見られる小舟が水に漬かっている。この小舟は誰が乗っていたのだろうか。

三恵さん・・・お恥ずかしい話ですが、葭切という鳥の名もはじめて知りました。俳句でよく題材にされるとのこと、もしかしたら見たことがあるのかもしれませんが。自分なりに目に浮かぶ光景が何故かシュールで幻想的で魅了されました。本当の趣旨は全然見当違いかもしれませんが、無知が露呈してしまうかもしれません。

紀久男・・・敏郎さんの義兄（中部電力ご勤務）の千曲川河畔ご招待の同伴をし、この句にそっくりな情景を経験しました。ウグイの捕れたてを串焼きにしてさんざん飲み食いした素晴らしい夜でした。その折、葭切のけたたましい啼き声に驚いたことを記憶しています。

### 八点句

お別れは木の教会で野薔薇咲く

五郎太

孤舟選者・・・野薔薇に囲まれた木造の教会で万里子先生と永遠の別れを。

忠彦さん・・・川合万里子先生のご葬儀は、吉祥寺のご自宅の近くの教会で行われました。先生が毎日の様にお祈りに行くこじんまりとした教会でした。ご親戚方々から先生を偲ぶ色々なお話が披露され、心に残る「お別れの会」でした

龍平さん・・・木の教会 野薔薇の中でのお別れ 惜しまれて逝かれた さぞかし清楚な方かなと。

康敏さん・・・内装が美しい木材の小さな教会でのお別れ。先生のご平安をお祈り致します。隆さん・・・恩師万里子先生は壁が薔薇で覆われた小さな教会で列席者の見送りをお受けに

なった。

亜也さん・「キリスト者」としてのお人柄に感銘を受けた式でした。

天牛さん・きつと万里子先生とのお別れでしょう。木の教会も野ばらも、先生らしいです。

## 七点句

居間客間干場となりぬ梅雨の空

忠彦

孤舟選者……客の去った老舗旅館。長雨のため館内は満艦飾状態。

ただしげさん……梅雨時のありふれた光景だが、上五からの句の流れが面白い

盛雄さん……庶民の日常生活が滲み出る佳句です。昭和は今も生きている。

## 六点句

蛇皮を脱ぎて輪廻を諾へり

孤舟

恵洲さん……脱皮の蛇は、確かに輪廻転生の象徴のように思えます。子供のころは家（東京都目黒区）の近所にもよく蛇や蛇の抜け殻を見たのですが…。

康敏さん……輪廻転生と蛇の脱皮の取り合わせには驚かされた。少々不気味だが見事だ。

雨蛙空がだんだん重くなり

孤舟

恵洲さん……選者の受ける感じでは、空が段々重くなると思っているのは雨蛙そのもの。

雨蛙になった気分で詠んだ一句と見て面白い。

康敏さん……「空がだんだん重く」で、梅雨雲の厚みを増して行く様子を巧みに表現している。

立ち上がる仔馬に朝の風清し

孤舟

堂哉さん……気持ちの良い景色が広まります。小海線の沿線でのんびりするのが、小さな夢です。

生垣の四角に刈られ夏匂ふ

五郎太

とみ子さん……夏らしくさっぱりした生垣から、植木屋さんの仕事ぶりも見えてきます。

恵洲さん……庭師が入って、生け垣がきれいに刈られ、床屋に行ってきたばかりのように

さっぱりしたところに夏が匂い立つようだという観察がよい。

康敏さん……庭師に生垣を刈って貰った。切られた葉のむせるような香に夏を感じた。

天牛さん……東京の山の手の家並にはよくこのような景色がありますね。

町名のここより変る夾竹桃

とみ子

五郎太さん……古い町に強い色の夾竹桃が咲いている景。これから暑い日が続きます。

恵洲さん……町名が変わるのは、夾竹桃と多分無関係なのでしょうが、無関係でないように

感じた感性を買いいます。

堂哉さん……散歩の途中の小さな発見ですね。

天牛さん……夾竹桃を見上げたら町名の札がかかっている、別の名になっているということ

は昔の町にはよくありました。うまいですね。

梨園にも禍事（まがごと）ありて梅雨募る

恵洲

盛雄さん……猿之助逮捕のニュースに多くの人が驚いた。ましてファンは……謎の多い

世界です。

ラケットの快音響く夏の空

ゆたか

舟選者……全仏オープンに加藤選手のラリーの応酬の後、思わぬハプニングから失格とは残念。ただしげさん……夏の晴れた日のテニス、汗をかきながらもすがすがしい感じがする。

やどかりに足裏疼く島の夏

びん

ただしげさん……夏の浜辺、素足で歩いているとやどかりを踏んでしまう。瀬戸の島での

思い出がなつかしい。

堂哉さん・・・青春の想い出ですか？下五が良いです。

※「やどかり」は春の季語で季重なりですが、島の夏の「夏」が強いので問題はないとしたい、と句会でのコメントもありました。

## 五点句

カクテルに彩り添ふるさくらんぼ

昇

孤舟選者・・・ブルーのカクテルが注がれたグラスの端に、真つ赤なアメリカンチェリーが添えられている。

康敏さん・・・マラスキーノ・チェリーでは季節感がない、フレッシュでないと。一粒でカクテルがぐんと映える。

盛雄さん・・・夜のラウンジでの愉しいひと時を、さくらんぼに託した大人の一句。

振り花素直になれぬ児に似たる

百合子

孤舟選者・・・花が螺旋状に振じて付くさまは、拗ねて駄々をこねる子を見ているようだ。

忠彦さん・・・草花の特徴をちよつと面白い角度で表現して、なるほどと思いました。

くにおさん・・・このお子さんは反抗期に入られたのでしょうか。振れた穂の雰囲気と適合している。

堂哉さん・・・素直が一番と言われながら、なかなか成れない私です

風に舞ふ青のリボンや夏帽子

正明

隆さん・・・「花に嵐のたとももあるぞ」は夏も続く。いつまで続く異常気象。

天牛さん・・・お子さんの帽子でしょうね。言葉少なく雰囲気が出ていますね。

檜茂る築百年に一人棲む

盛雄

千恵さん・・・築100年の家からは既に皆巣立ってしまい今は一人。でもこの家を守るぞという気概が「棲む」に現れてますね。

龍平さん・・・素晴らしいお暮らし。懂れます。

くにおさん・・・築百年の家で一人住まいの老境を詠っているが、この句からは老いのひとり暮らしの侘しさというものは余り感じられない。むしろ、数本の檜の大樹の鬱蒼としている天を仰ぎながら悠々自適の生活を享受しているように思えてくる。

百合子さん・・・築百年、大正の終りか昭和の初めに建てられたのでしょうか、何世代もの歴史を刻んだ家とそれを見守ってきた檜の木、先祖伝来の土地と家を守り穏やかに暮らす人、「」文字に物語を巡らしました

## 四点句

蝙蝠の膨らんで舞ふ夕間暮れ

孤舟

百合子さん・・・嘗て暮らしていた新潟市内の丁度夕間暮れ時のことでした。まだ遊び足りずに門前の路上で縄跳びしていたら、頭上に鳥とも虫ともつかぬ正体不明のものが飛び交い始めたのです。驚いて母を呼んだら「ああ、あれは蝙蝠よ」とこともなく答えました。小学一年生の夏の出来事です。

神馬舎の一灯暗し夏木立

くにお

恵洲さん・・・神馬を飼っているような大きな神社に昼から灯が灯っている木下闇のほの暗さがよくわかる。

康敏さん・・・神馬舎の暗い一灯で、背後の鬱蒼とした杜の神秘的な雰囲気が強調された。

堂哉さん・・・大阪の住吉大社の神馬舎を思い出しました。誠に、この句の通りです。立派な白馬がいつも静かにしていました！

馬手（めて）に傘弓手（ゆんで）に杖の梅雨に抗す 恵洲

健介さん・・・若さの象徴「血刀と手綱」とは参らぬものの、せめて「傘と杖」で勇ましく？  
ゆたかさん・・・難儀な状況の表現が見事です。

亜也さん・・・敢えて外出する気合の余りの字余り？「梅雨構え」など如何？

紀久男・・・ひと目読んだとき、またまた大怪我の私のことを詠んでいるのかと錯覚しました。

新緑に染まる思いに丘巡る 國護

紀久男・・・お仲間とのゴルフを楽しんでおられる情景でしょうか。「新緑に染まる思い」に  
実感がこもっています。

雲の間に囁くやうな梅雨の星 昇

ゆたかさん・・・情景の表現が細やかで見事です

天と地を分くるあぜ道苗代田 啓子

忠彦さん・・・代田に水が入り空が映し出される光景を、天と地で表現した雄大な句と思いました。  
した。

軽鴨の子のモンローウオーク時停める 盛雄

孤舟選者・・・親鴨の後を追う子鴨の中に、腰を振り振り独特な歩き方の子が可愛い。

昇さん・・・軽鴨の子（かるのこ）の歩く姿は可愛いので立ち止まって見入ってしまいました。  
す。モンローウオークは悩ましくて俳句には向かないと思っていましたが、なるほど軽鴨の子の歩行の意外性の比喻には驚きました。軽妙な句になりました。

紀久男・・・中七のカナ文字が絶妙です。但し、下五はいまひとつと思います。「車列停め」  
くらいでいかがでしょうか。

### 三点

縦の列右向け右の立葵 忠彦

孤舟選者・・・号令をかけられた訳ではないのに、右向きの花卉が縦列に並んでいる。

紫陽花は土の力で色を変え ただしげ

ゆたかさん・・・土の力で色を変えするという着想が斬新です

菜園の胡瓜漸く食卓へ ただしげ

隆さん・・・空き家の庭を耕し家庭菜園をした。苦瓜、胡瓜、茄子。作物は愛おしい。

闇せまる糺（ただす）の森や青葉木菟 康敏

くにおさん・・・「糺の森」と「青葉木菟」の取合せが面白い。糺の森にはまだ行ったことがない  
が、納涼と時鳥で有名。歌枕になっている。闇が深まる中で、ホーホーと単調で  
物悲しい声で鳴き始める。下鴨神社の夜の闇がさらに深くなっていくようだ。  
紀久男・・・夜の下鴨神社のある糺の森は全くの闇。「ほーっ、ほーっ」と啼く青葉木菟  
の、一種特異な悲し気な声は滅多に聴けません。

紫陽花の途切れず蒼き電車道 啓子

ゆたかさん・・・情景が目には浮かびます。

冥きより灯持て筋引く螢の来 啓子

百合子さん・・・18歳の夏休みに長野県小県郡青木村の『学生村』滞在時の夜、遭遇したこれま  
での人生でただ一度の光景が甦りました。まさしくこの通りでした。

見えを切る小さき役者夏袴 けい子

ただしげさん・・・初舞台の幼い役者が見えを切る。ほほえましく、良い役者になることを祈り  
たい。

隆さん・・・夏袴が大きく見える。

## 二点句

追悼 市川段四郎丈

地味な芸沢瀉手向けむセーヌ川

紀久男

隆さん・・・時は2007年、12代目團十郎がフランス語でパリオペラ座で口上を述べた。

段四郎もいた。セーヌ川河畔で段四郎と今井紀久男さんは写真を撮った。

百足虫走る脚の纏ることもなく

孤舟

とみ子さん・・・想像すると、笑ってしまいます。

百合子さん・・・百足は刺された家人の話では息がとまるほどの痛みだそうです、脚をうまく操りその逃げ足の速いこと、「言い得て妙」ですね その様子をじっと見ていた方のユーモアにも感心しました

梅雨中の異次元世界水族館

健介

千恵さん・・・最近の水族館は見学者が水の中に入っているような設えも結構多くてとても楽しいです。

ジャワ更紗花柄合ふて帯涼し

とみ子

ただしげさん・・・着物姿、すっきりと、帯も似合って涼しそうに見える。

堂哉さん・・・長年の友人の奥さんが、ジャワ更紗のプロです。とても良くお似合いです

※孤舟選者・・・「合ふて」は本来は「合ひて」です。ただ「合うて」もよく使われています。

歌舞伎ってファンタジーかも虹立ちぬ

千恵

正明さん・・・歌舞伎どころかカラオケもある意味で、又、テレビも力が無いようです。時代が急激に変わりました。怖いくらいです。

紀久男・・・歌舞伎のことをファンタジーかも、と読まれた句は初めてです。「歌舞伎とは」とせずに「歌舞伎って」としたのは如何にも現代風です。下五の季語が効いています。久し振りにOver the rainbowを歌いくなりました。

昔はきらい今はそれなり豆御飯

千恵

とみ子さん・・・私も子どもの頃は、お豆腐嫌いでしたが、今は美味しいと思います。

亜也さん・・・同感。もの足りないというか、インパクトがないというか。季節感を味わうというのがオトナの味覚らしいデス。

手に三つ染み見つけたる梅雨入かな

千恵

亜也さん・・・「梅雨入り」に相応しいささかの遣る瀬無さ。

梅雨空や卑弥呼は何処また闇へ

ただしげ

千恵さん・・・吉野ケ里遺跡からは結局卑弥呼の手掛かりになるようなものは出てきませんでした。これからは九州説と畿内説論争は続きます。

江ノ島にて

黒南風や荒磯（ありそ）見下ろす芭蕉句碑 康敏

ゆたかさん・・・情景の表現が素直で情景がよく判ります

風強しかぶり直してパナマ帽

國護

天牛さん・・・軽くかぶって家を出た麦わら帽子をしっぴりかぶったのでしよう、飛ばぬように。

五月雨や読経のごとく節つけて

百合子

孝岳さん・・・五月雨の降る音を読経の節になぞらえる妙。感性が鋭い。感服いたしました。  
天牛さん・・・こうなると五月雨もうとうしくなくていいですね。

落伸びる畑の隅に墓ある地

啓子

亜也さん・・・先祖代々の地の営み。

「みなづき」の三角うれし略点前

亜也

龍平さん・・・これぞ茶道に映る大和人のセンス 室町の頃でも高評か。

紀久男・・・お菓子の「みなづき」は残念ながら季語にはなっていないようですが、捨てるに惜しい出来の句です。

## 一点

夏場所や頭捻りと云ふ珍技出る

紀久男

くにおさん・・・「ずぶねり」という滅多にない決まり手で国技館が沸いた。こうした技が見られたことはラッキーだった。下五は説明的？

夏鶯の美声に釣られ病棟を出

紀久男

五郎太さん・・・早く退院されますように。

句師からの教へ心に勿忘草

忠彦

紀久男・・・吟行で御一緒したときに詠まれた句だと思えます。これは忘れられない句です。

峰雲や翔平聡太の神懸る

健介

孤舟選者・・・大谷も藤井も雲の峰のように力強く挑戦し、信じられない成果を収めている。

三角の菓子が決まりの夏祓

五郎太

くにおさん・・・夏祓は陰暦六月の晦日に無病息災を祈願する行事。大きな茅の輪を潜る。子供の頃は、毎年この日にお宮に詣で、お駄賃として三角の形をしたお菓子をいただいていたのだろう。

桜桃忌小屋に太宰の「ハムレット」

千恵

隆さん・・・太宰治の墓地を初めて訪れる前にネットでみた。さくらんぼを墓碑名の彫りに並べて埋め込んでいる写真があった。桜桃忌の人気の高さか。

二十歳夏史上最速名人位

ただしげ

とみ子さん・・・漢字ばかりで句を詠まれたのは、見事です。

夢ぬちの父若くして白き靴

堂哉

龍平さん・・・往時は写真といえは盛装をする事多し 白い靴の粋な出立ち 多分幸せな日のワンショット 夢で会いました

朝の如雨露百合の若芽を膨らます

堂哉

亜也さん・・・いつくしんでいる様子がよく伝わります。

沙羅の花浄土の庭を喜べり

雅夫

五郎太さん・・・夏椿は一夜で落ちてしまうが、庭を埋める白い花は上を向き、笑っているよう。浄土はかくの如し。巧みな句です。

小学校激減続き昭和去る

國護

※無季語です。

峠来て松蟬聴けり裏日本

びん

ゆたかさん・・・峠で聴く松蟬に格別の情緒が

億年のメタセコイアに梅雨の雨

啓子

孤舟選者・・・メタセコイアは生きている化石。ジャングルをなす老大木に豊かな雨が降り注ぐ。武者人形暗き座敷の奥に立つ けい子

ただしげさん・・・武者人形が座敷の奥にまだ飾られている。怪談ではないがなんとなく涼しさを感ずる。



## 【次回青葉会予定】

令和五年七月二十七日(木)

時間：十三時～十六時半

会場：世田谷区三軒茶屋施設 5階しやれなあと 会議室

◇ご出席者は当季雑詠5句。投句は2句まで。 事前にPC入力による清記を作成致します為、

ご出席者の出句予定句及び投句、いづれも当方(星田)に頂戴致します。

締切：七月二十五日(火) 中。

星田メール、或いはFAX (03-3421-9772) 宛頂戴できれば当日配布の清記に反映致します。

☆三茶しやれなあと 東京都世田谷区太子堂 2-16-7 茶沢通り宝くじ売り場が目印のビル

△予告△八月WEB句会のお知らせ!! 八月は猛暑が予想されるため・・・(詳細後日)

八月青葉会は WEB上での句会に決定。皆さまには、五句のご投句をお願いする予定です。



## 【青葉会報】

一、 時折ぱらりと落ちる雨のある六月二十二日、青葉会句会を開催しました。このところお怪我でご欠席の紀久男さんはやむを得ないとして、毎回十名前後のご参加者で、先に清記を作成しておくことにしたため、選句、披講ともに焦らず、選句の感想など伺うことが出来、また、参加者の寄贈による日本酒や銘菓で和気藹々としたお席が常となりました。世話人の紀久男さんからも病院のベッドからしつかりと投句・選句を頂戴しております。皆さまからの六月選句も出揃い、五月に引き続き、康敏さんが最高得点、次点に五郎太さん、忠彦さんと続きました。今回は会員の皆さまから、佳句が多く選句に苦労したとのご感想が寄せられておりますほどに、比較的得票数がばらけ、これも又良し、と感じました。選句に苦労↓選句も愉し、の意味と存じます。

次回青葉会予定に記しましたように、今月7月は通常の句会を開催致しますが、来月八月は昨今の殺人的猛暑に鑑み、通常の句会をこの八月に限り「WEB句会」に切り替えることと致しました。一昨年コロナ禍において数回実施した要領と同じ形を取らせていただこうと考えております。追って要領についてはお知らせ申し上げますことといたく存じます。ご協力をよろしくお願い申し上げます。

## 三、孤舟選者近詠

琴線に触るる忠言野火走る

三二一トランペットを星空へ

雁風呂やいづれひとりとなるふたり

櫓を漕ぐは一寸法師花筏

仔馬駆け鬣も尾も風となる

四、青葉会を長く指導して下さいました万里子先生が昇天され、青葉会で御指導を受けられた方々

がお別れの会に参列され見届けられました。あらためて心からご冥福をお祈りいたします。

就きましては追悼句を募集致します。

締切は8月末日、ご投句で3句まで受け付けさせていただきます。(受付：星田まで)

※既に追悼句を頂戴しております皆さまには、すべて発表してよろしいかご了解を頂戴出来ましたら幸いに存じます。

令和五年七月十三日

(了)